いにしへに　ありけむ人も　わが如か
三輪の檜原に　挿頭折りけむ

柿本朝臣人麻呂歌集　巻七・一一一八

やまと　万葉がたり

前回（10月31日）は、巻向の檜原の歌でしたが、今回は三輪の檜原を詠んだ歌をご紹介します。「万葉集」には、巻向の檜原が3首、三輪の檜原が2首、始瀬（初瀬）の檜原が1首詠まれています。古代には巻向から三輪を経て初瀬のあたりまで、檜が生い茂っていたのかもしれません。

この歌は、柿本人麻呂の歌集から「万葉集」に採録された歌です。作者は、「いにしへに　ありけむ人も　わが如か」と歌い出し、その昔にいたという人と自分とを重ね合わせています。この重ね合わせは、三輪の檜原という土地で挿頭を折るという行為によって着想されているようです。三輪は、ヤマト王権揺籃の地であり、人麻呂の時代にも「古事記」「日本書紀」に見えるような三輪山の伝承や天皇の宮に関わる伝承などがあったことでしょう。この歌の作者にも、三輪には「いにしへ」のイメージがあったことと思われます。

また、挿頭を折り、髪飾りにするという行為には、植物の持つ生命力を自分に宿すという呪術的な意味があったと考えられています。神話・伝説の残る三輪という土地で、昔の人もしたであろうこうした呪的な行為をすることによって、「いにしへに　ありけむ人」と自分とが重なるようなイメージを持ったということなのでしょう。まるでタイムリープのような発想、というと、少しくだけすぎでしょうか。

ところで、「万葉集」以降の歌集にも「三輪の檜原」は数多く詠まれますが、その場合は挿頭がよく詠まれるようになります。例えば、鎌倉時代の「新後撰和歌集」巻十七・一二〇七番歌「いくとせのかざしをりけむ　いにしへの　三わのひばらの　苔のかよひぢ」（作者は藤原定家。歌は「新編国歌大観」（角川書店）から引用）などがあります。時間を超えるという発想の人麻呂歌集の歌が、時間を超えて後世の歌に影響を与え続けた、面白い事例だと思います。

【訳】昔いたという人も私のように、三輪の檜原に挿頭を折ってはさしたことだろう。

（県立万葉文化館研究員・吉原啓）

＝原則、隔週掲載

毎日新聞
2018年(平成30年)11月28日(水) 七 奈良

やまと万葉がたり

この頃の わが恋力 記し集め 功に申さば 五位の冠

作者未詳(巻十六・三八五八)

奈良県の職員として勤務し始めた頃に一番驚いたこと。それは書類の多さでした。それは書類の多さでした。それまで、民間企業や大学でしかアルバイトをしたことがなかった私にとって、「え? ペン1本買うのに一体何枚書類が要るの!?」と衝撃を受けたものです。書類がすべて、とは言いませんが、社会において書類が重要な役割を担っているのもまた事実です。それは古代の律令官人たちも同じでした。今回の歌は作者未詳ですが、おそらく、名も無き律令官人なのではないかと思います。

この歌の作者は、自分がこれまで恋にかけてきた労力を書類に書き連ねて上官に申請したら、五位の位はもらえるほどである、と主張しています。官人の勤務評定に関する規定である「考課令」には、各役所の長官が一年間の「功過行能」を本人の前で読み上げて評価する、とあります。「功」は昇進に関わる優れた業績、といったところでしょうか。歌に詠まれる「功」もこの評定を意識していると思われ、「俺の恋力を評価してくれ!」という、冗談交じりの叫び声が聞こえてきそうです。

「五位」という具体的な位が登場するのにも、深い意味があります。官人たちの位(位階)は初位から一位まであり、さらに各階は正・従(初位は大・少)、上・下の四階に分かれています。そのうち五位以上、すなわち「従五位下」以上がいわゆる貴族階級となり、六位以下とは給与や待遇面で著しい差がありました。五位以上となるのは出自によるところが大きく、下級官人たちがこの「従五位下」に到達することは難しく、憧れの位であったといえます。

この歌の作者は、熱を入れていた女性にいくら尽くしても手応えもなく、その腹いせにこんな戯れの歌を作ったのでしょう。恋に仕事に悪戦苦闘する、古代の人びとの生き生きとした日常の姿が垣間見える、私の好きな一首です。

(県立万葉文化館主任研究員・大谷歩)

【訳】近ごろの私の恋にかける力を書き集めて功績として申請したら五位の位はもらえるだろう。

=原則、隔週掲載